

高次方程式の判別式について

おおき みのる
大木 實

係数が実数の整方程式 $f(x)=0$ ①

について $f(x)=a_0x^2+a_1x+a_2=a_0(x-\alpha)(x-\beta)$ ($a_0 \neq 0$) ②

ならば、解 α, β が重解か否か、また、実数か否か、を調べるのに

$D=a_1^2-4a_0a_2=a_0^2(\alpha-\beta)^2$ の値を求め、 $D=0$ か $D \neq 0$ か、また $D > 0$ か $D < 0$ かを調べます。

D を "方程式①の判別式；整式②の判別式； α, β の判別式" などといいます。

この考えを一般化し、今後①は n 次方程式の場合を扱い

$f(x)=a_0x^n+a_1x^{n-1}+\dots+a_n$ ($a_0 \neq 0$) ($n \geq 2$) ③

として、その判別式の条件を考えます。

このとき①が解として虚数 $\alpha=p+qi$ ($p, q(\neq 0)$ は実数、 $i=(-1)^{\frac{1}{2}}$) をもてば、同時に α の共役複素数 $\bar{\alpha}=p-qi$ も解となります。ゆえに、 $f(x)$ は $(x-\alpha)(x-\bar{\alpha})=(x-p)^2+q^2$ を因数にもちます。

①は n 個の解をもつので、 m 対の共役複素数 $\alpha_k=p_k+q_ki, \bar{\alpha}_k=p_k-q_ki$ ($k=1, 2, \dots, m$) と、残り $s=n-2m$ 個の実数 t_h ($h=1, 2, \dots, s$) を解とすると

$$f(x)=a_0 \prod_{k=1}^m \{x-(p_k+q_ki)\} \{x-(p_k-q_ki)\} \prod_{h=1}^s (x-t_h) = a_0 \prod_{k=1}^m (x-\alpha_k)(x-\bar{\alpha}_k) \prod_{h=1}^s (x-t_h)$$

と表せます。 $(x-\alpha_k)(x-\bar{\alpha}_k)$ の判別式が $(\alpha_k-\bar{\alpha}_k)^2=-4q_k^2 < 0$ なので

$\prod_{k=1}^m (\alpha_k-\bar{\alpha}_k)^2 = \prod_{k=1}^m (-4q_k^2)$ の符号は $(-1)^m$ の符号と同じです。

n が奇数のとき s は奇数となり①は 1 個以上の実数解をもちます[充分大きな正数 x_0 をとると $x < -x_0$ のとき $a_0f(x) < 0$, $x > x_0$ のとき $a_0f(x) > 0$ なので明らかです]。

$$(p_k, q_k) = (p_{k'}, q_{k'}), 1 \leq k < k' \leq m \text{ あるいは } t_h = t_{h'}, 1 \leq h < h' \leq s$$

を満たす k, k' あるいは h, h' が存在するときは①は重解をもち

$\prod_{k=2}^m \prod_{k'=1}^{k-1} (\alpha_k - \alpha_{k'}) \prod_{h=2}^s \prod_{h'=1}^{h-1} (t_h - t_{h'})$ の値は 0 となります。

$$\alpha_{m+k} = \bar{\alpha}_k (k=1, 2, \dots, m), s \geq 1 \text{ のとき } \alpha_{2m+h} = t_h (h=1, 2, \dots, s) \quad ④$$

とおくと α_k ($k=1, 2, \dots, n$) は①のすべての解を表します。

③の判別式を次式 D で定義します。 $D = a_0^{2n-2} \prod_{k=2}^n \prod_{k'=1}^{k-1} (\alpha_k - \alpha_{k'})^2$ ⑤

ただし、⑤の右辺は③の係数 a_k ($k=0, 1, 2, \dots, n$) を用いて表される整式です。

命題 1. ⑤の D の値は①が重解をもつときは 0 となり、重解がなく共役複素数の解を m 対もつときはその符号が、 m が偶数のときは正、奇数のときは負となります。

証明：④の場合 $D = D(m, s)$ で表し、 $D \neq 0$ のとき $\frac{D}{|D|} = \varepsilon(m, s)$ とおきます。

$$\varepsilon(0, h) = 1 (h=1, 2, \dots), \varepsilon(1, 0) = -1, \varepsilon(1, 1) = -1$$

$$D(m, s+1) = a_0^2 D(m, s) \prod_{k=1}^m \{(t_{s+1} - \alpha_k)(t_{s+1} - \bar{\alpha}_k)\}^2 \prod_{h=1}^s (t_{s+1} - t_h)^2,$$

$$(t_{s+1} - \alpha_k)(t_{s+1} - \bar{\alpha}_k) > 0 \quad \therefore \varepsilon(m, s+1) = \varepsilon(m, s) \quad \therefore \varepsilon(1, h) = -1 (h=0, 1, 2, \dots)$$

$$D(m+1, s) = a_0^4 D(m, s) (\alpha_{m+1} - \bar{\alpha}_{m+1})^2 \prod_{h=1}^s \{(\alpha_{m+1} - t_h) (\bar{\alpha}_{m+1} - t_h)\}^2$$

$$\cdot \prod_{h=1}^s \{(\alpha_{m+1} - \alpha_k) (\bar{\alpha}_{m+1} - \bar{\alpha}_k) (\alpha_{m+1} - \bar{\alpha}_k) (\bar{\alpha}_{m+1} - \alpha_k)\}^2$$

$$(\alpha_{m+1} - t_h) (\bar{\alpha}_{m+1} - t_h) > 0, (\alpha_{m+1} - \alpha_k) (\bar{\alpha}_{m+1} - \bar{\alpha}_k) > 0, (\alpha_{m+1} - \bar{\alpha}_k) (\bar{\alpha}_{m+1} - \alpha_k) > 0,$$

$$(\alpha_{m+1} - \bar{\alpha}_{m+1})^2 < 0 \quad \therefore \varepsilon(m+1, s) = -\varepsilon(m, s) \quad \therefore \varepsilon(k, h) = (-1)^k \varepsilon(0, h) = (-1)^k$$

$$(k=0, 1, 2, \dots; h=0, 1, 2, \dots). \textcircled{5} \text{から} \textcircled{1} \text{の解に重解があれば} D=0 \text{となり, 逆も成立.}$$

命題2. ⑤のDを③のf(x)の係数 a_k ($k=0, 1, 2, \dots, n$)を使って表せます.

証明:

$$E(\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_n) = \begin{vmatrix} 1 & \alpha_1 & \alpha_1^2 & \alpha_1^3 & * & \alpha_1^{n-1} \\ 1 & \alpha_2 & \alpha_2^2 & \alpha_2^3 & * & \alpha_2^{n-1} \\ 1 & \alpha_3 & \alpha_3^2 & \alpha_3^3 & * & \alpha_3^{n-1} \\ * & * & * & * & * & * \\ 1 & \alpha_n & \alpha_n^2 & \alpha_n^3 & * & \alpha_n^{n-1} \end{vmatrix}$$

とおくとEは $\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_n$ に関し次数が $1+2+\dots+(n-1) = \frac{n(n-1)}{2}$ の同次式となり, 任意の k, m ($1 \leq k < m \leq n$)で $E(\dots, \alpha_k, \dots, \alpha_m, \dots)$ に対し $E(\dots, \alpha_k, \dots, \alpha_k, \dots) = 0$ となり, Eは $\alpha_m - \alpha_k$ ($1 \leq k < m \leq n$)を因数にもちます. 展開式の項 $\alpha_2 \alpha_3^2 \dots \alpha_n^{n-1}$ の係数が1なので次式が成立します.

$$E = \prod_{k=2}^n \prod_{m=1}^{k-1} (\alpha_k - \alpha_m) \quad \textcircled{6}$$

$$E^2 = \begin{vmatrix} 1 & 1 & * & * & 1 \\ \alpha_1 & \alpha_2 & * & * & \alpha_n \\ * & * & * & * & * \\ * & * & * & * & * \\ \alpha_1^{n-1} & * & * & * & \alpha_n^{n-1} \end{vmatrix} \begin{vmatrix} 1 & \alpha_1 & * & * & \alpha_1^{n-1} \\ 1 & \alpha_2 & * & * & \alpha_2^{n-1} \\ * & * & * & * & * \\ * & * & * & * & * \\ 1 & \alpha_n & * & * & \alpha_n^{n-1} \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} \beta_1 & \beta_2 & * & & \beta_n \\ \beta_2 & \beta_3 & * & * & \beta_{n+1} \\ * & * & * & * & * \\ * & * & * & * & * \\ \beta_n & \beta_{n+1} & * & * & \beta_{2n-1} \end{vmatrix}$$

$$\beta_k = \prod_{h=1}^n \alpha_h^{k-1} \text{は} \alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_n \text{に関し対称式なので} \textcircled{5}, \textcircled{6} \text{から} D = a_0^{2n-2} E^2 \quad \textcircled{7}$$

は $a_0, a_1, a_2, \dots, a_n$ で表せます.

命題3. $n \geq 2$ のとき①が重解をもつための必要十分な条件は

① $[f(x)=0]$ と①の微分式 $[f'(x)=0]$ とが共通解をもつことです.

証明: α が①の重解のとき $f(x) = (x-\alpha)^2 p(x)$ ただし, $p(x)$ は $n-2$ 次式とおけますから

$$f'(x) = (x-\alpha)\{2p(x) + (x-\alpha)p'(x)\}$$

となり, $f(x), f'(x)$ は共通な因数 $x-\alpha$ をもちます.

逆に $f(\alpha)=0$ かつ $f'(\alpha)=0$ のとき

$n-1$ (≥ 1)次式の $f'(x)$ は $f'(x) = (x-\alpha)h(x)$ $h(x)$ は $n-2$ 次式とおけます.

$$\therefore f(x) = \int_{\alpha}^x (x-\alpha)h(x) dx = \frac{(x-\alpha)^2 h(x) - \int_{\alpha}^x (x-\alpha)^2 h'(x) dx}{2}$$

$$\lim_{x \rightarrow \alpha} \frac{\int_{\alpha}^x (x-\alpha)^2 h'(x) dx}{x-\alpha} = \lim_{x \rightarrow \alpha} (x-\alpha)^2 h'(x) = 0, \int_{\alpha}^x (x-\alpha)^2 h'(x) dx \text{は} n \text{次式,}$$

$$\therefore \frac{\int_{\alpha}^x (x-\alpha)^2 h'(x) dx}{x-\alpha} = (x-\alpha)g(x), g(x) \text{は} n-2 \text{次式とおけます.}$$

$$\therefore f(x) = \frac{(x-\alpha)^2 \{h(x) - g(x)\}}{2}$$

$f(x)$ は n (≥ 2)次式なので $h(x) - g(x)$ は定数0ではなく, ①は重解 α をもちます.

$$2) f(x) = x^3 + x^2 - 2 \quad \therefore f'(x) = 3x^2 + 2x$$

$$D = - \begin{vmatrix} 1 & 1 & -2 & \\ & 1 & 1 & -2 \\ 3 & 2 & & \\ & 3 & 2 & \\ & & 3 & 2 \end{vmatrix} = -100 < 0 \quad f(x) = (x-1)(x^2+2x+2) \quad \text{ゆえに } x=1, -1 \pm i$$

$$3) f(x) = x^3 - x^2 - x + 1 \quad \therefore f'(x) = 3x^2 - 2x - 1$$

$$D = - \begin{vmatrix} 1 & -1 & -1 & 1 \\ & 1 & -1 & -1 & 1 \\ 3 & -2 & -1 & & \\ & 3 & -2 & -1 & \\ & & 3 & -2 & -1 \end{vmatrix} = 0 \quad f(x) = (x+1)(x-1)^2 \quad \text{ゆえに } x=-1, 1, 1$$

$$4) f(x) = x^4 + 5x^2 + 4 \quad \therefore f'(x) = 4x^3 + 10x$$

$$D = \begin{vmatrix} 1 & & 5 & & 4 \\ & 1 & & 5 & & 4 \\ & & 1 & & 5 & & 4 \\ 4 & & & 10 & & & \\ & 4 & & & 10 & & \\ & & 4 & & & 10 & \\ & & & 4 & & & 10 \end{vmatrix} = 5184 > 0 \quad f(x) = (x^2+1)(x^2+4) \quad \text{ゆえに } x = \pm i, \pm 2i$$

$$5) f(x) = x^4 - 2x^3 + 2x^2 - 2x + 1 \quad \therefore f'(x) = 4x^3 - 6x^2 + 4x - 2$$

$$D = \begin{vmatrix} 1 & -2 & 2 & -2 & 1 \\ & 1 & -2 & 2 & -2 & 1 \\ & & 1 & -2 & 2 & -2 & 1 \\ 4 & -6 & 4 & -2 & & & \\ & 4 & -6 & 4 & -2 & & \\ & & 4 & -6 & 4 & -2 & \\ & & & 4 & -6 & 4 & -2 \end{vmatrix} = 0 \quad f(x) = (x-1)^2(x^2+1) \quad \text{ゆえに } x=1, 1, \pm i$$

《重解に関する補足》

命題 6. n 次方程式 $f(x) = 0$ が α を m ($2 \leq m \leq n$) 重解にもつ必要十分な条件は微分式

$$f^{(r)}(\alpha) = 0 \quad (r=0, 1, 2, \dots, m-1), \quad f^{(m)}(\alpha) \neq 0 \quad \text{がすべて成立することです.}$$

証明: $f(x)$ を $f(x) = \sum_{k=0}^n c_k (x-\alpha)^k$ とおき $(x-\alpha)$ のべき級数に展開すると, r 次導関数は

$$f^{(r)}(x) = \sum_{k=r}^n c_k k(k-1)\cdots(k-r+1)(x-\alpha)^{k-r} \quad (0 \leq r \leq n) \quad \therefore f^{(r)}(\alpha) = c_{r+r}!$$

必要条件: $f(x)$ が $(x-\alpha)^m$ で割り切れ, $(x-\alpha)^{m+1}$ で割り切れないためには

$$c_r = 0 \quad (r=0, 1, 2, \dots, m-1) \quad \text{かつ} \quad c_m \neq 0$$

$$\therefore f^{(r)}(\alpha) = 0 \quad (r=0, 1, 2, \dots, m-1) \quad \text{かつ} \quad f^{(m)}(\alpha) \neq 0 \quad \text{が必要です.}$$

十分条件: $f^{(r)}(\alpha) = 0$ ($r=0, 1, 2, \dots, m-1$) かつ $f^{(m)}(\alpha) \neq 0$ のときは

$$c_r = 0 \quad (r=0, 1, 2, \dots, m-1) \quad \text{かつ} \quad c_m \neq 0 \quad \text{が成立するので } f(x) \text{ は因数 } (x-\alpha) \text{ をちょうど } m \text{ 個もち, } \alpha \text{ は } f(x) = 0 \text{ の } m \text{ 重解になります.}$$

(ただし, $r=0, 1, 2, \dots, m-1$)

[$f(x)=0$ の重解 α が求まれば、その重解度 m は $f(x)$ を組立除法により $x-\alpha$ で繰り返し割って求めるのが便利です]

命題7. 高次方程式 $f(x)=0$ について、 $f(x)$ と $f'(x)$ の最大公約数を $g(x)$ とすると、 $f(x)=0$ の重解は、同時に $g(x)=0$ の解であり、 α が $f(x)=0$ の $m(\geq 3)$ 重解のときは、 α は同時に $g(x)=0$ の $m-1$ 重解です。逆も成立します。

証明：命題3. により α が $f(x)$ の重解のときは $x-\alpha$ は $f(x)$ 、 $f'(x)$ 共通の因数なので $g(x)$ の因数です。

$$\therefore g(\alpha)=0$$

逆に $g(\alpha)=0$ ならば $f(\alpha)=0$ 、 $f'(\alpha)=0$ が成立し、 α は $f(x)=0$ の重解です。

命題6. により α が $f(x)$ の m 重解のときは $f(x)$ は $(x-\alpha)^m$ で割れ、 $f'(x)$ の $(x-\alpha)$ べき展開式が $(x-\alpha)^{m-1}$ で割れ、 $(x-\alpha)^m$ で割れませんから $g(x)$ は $(x-\alpha)^{m-1}$ を因数にもち、 α は $g(x)=0$ の $m-1$ 重解です。

逆に α が $g(x)=0$ の $m-1$ 重解のとき $f'(x)$ は $(x-\alpha)^{m-1}$ で割れ、 $(x-\alpha)$ べき展開式は

$$f'(x) = (x-\alpha)^{m-1} \sum_{k=0}^{n-m} c_k (x-\alpha)^k = \sum_{k=0}^{n-m} c_k (x-\alpha)^{m+k-1} \quad (\text{各 } c_k \text{ は定数}) \quad \text{と表せます。}$$

$$\therefore f(x) = \sum_{k=0}^{n-m} \frac{c_k (x-\alpha)^{m+k}}{m+k} + c \quad (c \text{ は定数}) \quad f(\alpha)=0 \quad \therefore c=0$$

$$\therefore f(x) = (x-\alpha)^m \sum_{k=0}^{n-m} \frac{c_k}{m+k} (x-\alpha)^k \text{ となり } \alpha \text{ は } f(x)=0 \text{ の } m \text{ 重解になります。}$$

1995.10.1 (元 追手門学院高校)